さまで多からず、まづ古今和歌集のなかには、高野大師の御弟子眞雅僧都のときはの山のひと歌あり、これやかの色好みの家の風をつたへ、花薄ほに顯れてまめなる人にもかたり傳ふるごとく成けらし、其外にも代々の撰集にのせられし言の葉、拾遺集より新古今までは、わづかにちりまじりにたれど、その〻ち十三代集の中には、つや〳〵見出るふしも侍らず、もしやありもやすらん、わが見るところのくはしからぬにや侍りけん、○中略　北村季吟書之

〔台記〕康治元年三月一日甲辰、自宿所參、深更召或舞人、懷抱寵甚、

久安三年四月廿二日乙卯、今夜始千手供二壇、八祈三　又於持佛堂千手御前、余○藤原頼長禮拜千八十遍、同祈　此記書八三者、是公春也、　七月廿九日辛卯、昨今兩夜、召秦兼任隨身引入內寢、　九月十二日癸酉、幸天王寺、御車輿余○藤原頼長依仰○鳥羽乘手輿候後陣、○中略仰曰、此寺舞人之中、有容貌壯麗者、今日有其人乎、法皇爲人好美人、故有此言、對曰、所候也、名公方事訖、法皇改御裝束、○註幸金堂、　十三日甲戌、余下宿所、召舞人公方、引入臥內、　四年正月五日甲子、今夜入義賢於臥內、及無禮、有景味、不快後、初有此事、　三月十九日丁丑、經雄山、著天王寺、今夜召舞人公方、欲通、夢明日可入堂、男犯猶以不淨、因之不通、可謂奇異事、

〔古今著聞集八好色〕紫金臺寺御室に、千手といふ御寵童有けり、みめよく心さま優也けり、笛を吹、今樣などうたひければ、御いとをしみはなはだしかりける程に、又參川といふ童初て參じたりけり、箏ひき歌よみ侍りけり、是も又寵有て、千手がきらすこしをとりければ、面目なしとや、退出して、久敷參らざりけり、或日酒宴の事有て、さま〴〵の御あそび有けるに、御弟子の守覺法親王なども其座におはしましけり、千手はなど候はぬやらん、召て笛ふかせ今樣などうたはせ候はゞやと申させ給ひければ、則御使をつかはしめされけるに、此程所勞の事候とて參らざりけり、御使再三に及ければ、さのみは子細難申て參にけり、けん紋紗の兩面の水干小袖に、むばらこき雀の居たるをぞぬふたりけり、紫のすそごの袴をきたり、ことにあざやかにさうぞきたれども、物